

わがまち

はっけん

Sai発

浦和で

石井桃子をよむ



『幼ものがたり』原画展

吉井爽子氏による挿絵原画を展示いたします。
平成21年4月16日(木)～30日(木)
(20日(月)と22日(水)はお休み)
午前10時から午後5時まで
中央図書館イベントルームにて

『幼ものがたり』のころ。前列左から2番目、犬を抱いているのが石井さん。ほか、両親と姉たち、姉の子たち、そして「まあちゃん」。大正中期

写真：3点ともさいたま市立中央図書館所蔵

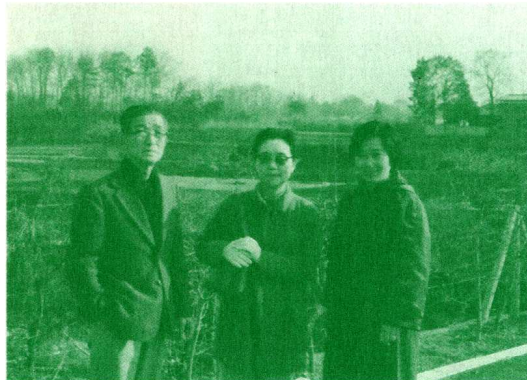
東京に住んでいる人間が、生まれ故郷などというわさをするには、たしかに浦和は近すぎる。けれども、浦和は、生まれたるところだし、両親がねむっているところだし、また、いまも身内が住んでいるところだしするので、私にとっては、日本じゅうでかけがえのない場所なのだ。

「生まれ故郷」(1954年、『石井桃子集7』所収)

児童文学作家の石井桃子さんが一〇一歳で亡くなって一年。その遺産の豊かさは石井さんの不在なと感じられないほどです。

とはいえ、石井さんがいないのは事実。いま石井さんを知ろうとするなら、残された作品や言葉にあたるしかありません。まるで物語の登場人物のように、言葉のなかに石井さんを思い描いてゆく…それは、いまはじめて意識的に石井作品を読む人はもちろん、いままで親しんできた人にとっても、スリリングな読書になるのではないでしょうが。

そんな石井さんの物語は、ここ、さいたま市からはじまります。



一九〇七年に現在の浦和区常盤にうまれた石井さんは、幼少の頃の思い出を一九七七年から雑誌上で発表しはじめます。それが『幼ものがたり』です。

■『幼ものがたり』

石井さんは「自分と出会う」(『石井桃子集7』所収)というエッセイで、「もうひとり」の自分によって外から見られたと思える記憶」について語っています。ある出来事が「ヒントの合った写真のように」、「鮮明な写真」として、石井さん自身も映しこんで、記憶に残ってしまうことがあるとのこと。

この不思議な感覚は『幼ものがたり』でも「まるでもう一人の私が、自分を外がわから見たいように、あたりの情景もとも、心に描ける」と語られていて、『幼ものがたり』を特徴づけます。

『幼ものがたり』がただの思い出ばなしのようにみえないのは、まるで一枚の写真から事件を推理してゆくミステリーさながら、幼いころの出来事がある決定的なイメージから手探りでたどってゆく過程そのものが書かれているからです。どうしても名前を思い出せない友達がいったり、前後の脈絡を欠いて写真のように焼きついた記憶があったりするかと思えば、話を

すすめるうちに思い出してくる出来事もあります。そんなサスペンスと、簡潔でユーモラスな描写がこの『幼ものがたり』の魅力。

そしてさいたま市に住む者の特権は、石井さんが語る舞台が身近にあることです。

「私の家は、中仙道に面していて昔の浦和の宿の北のはずれにあつた」とあるとおり、いまの浦和駅と北浦和駅の間辺りで石井さんはうまれました。そこは幼い子のこと、おもな舞台は生家の近辺に限られますが、だからこそ、浦和を知らない人はどう読むのだろうと不安になってしまつくり、浦和の描写に満ちています。

もちろんいまでは変わってしまった風景や生活(ちよんまげのおじいさん)もありますが、『幼ものがたり』のなかの石井桃子は、よりいっそうリアリティをもつて私たちのまえに登場してくるはずだ。

■石井桃子と浦和

「くくなる前年の10月」、浦和の昔のことで確かめたいことがあるのだが」と石井さんから図書館に連絡をいただき、資料を用意して、職員が石井さんを訪問する

機会がありました。その際手土産に持参したお団子を見て、「駅前の店のものね」と石井さん。「昔、父親である主人が亡くなって、女手だけでどうするのだからと皆心配していたの。でも、娘三人が店番に出るようになると、師範学校の学生たちの行列ができ繁盛してね。世の中、うまくまわるものだなと感心したものです」と、臨時に記憶がよみがえってこられたのでしよう、思いがけない話を伺うことができました。浦和はいつまでも気がかかる町であったようです。

『幼ものがたり』以外でも折にふれて浦和について語った石井さん。ぜひ、浦和をきっかけに石井桃子の世界にふれてみてください。

引用・参考文献

- ・石井桃子集 4 『幼ものがたり』岩波書店 1999
- ・『同 7 エッセイ集』岩波書店 1999
- ・金井美恵子「私の幼年時に埋め込まれた一部分 石井桃子」(『本を書く人読まぬ人』この世はほんのPART 2) 所収 日本文芸社 1999
- ・石井桃子(川本三郎インタビュー)「本の出会い・人との出会い」(『近代日本文化論』8) 所収 岩波書店 2000
- ・並木せつ子『本と浦和』さいたま市立中央図書館 2008